



<さみだれを化粧に生かす半夏生> 哲風

半夏生（はんげしょう）は、東アジアに分布するドクダミ科の湿地性植物で、6月末から7月初めの梅雨期に、頂の葉の下半分が白くなり、同時に白い穂状の花を咲かせます。葉の半分だけ白くお化粧をしたようにも見えるところから、こうよばれてきたようです。日本では年々分布が減り、地域によっては絶滅が懸念されていますが、京都では、東山の（風神雷神で有名な）建仁寺境内の両足院の庭園にあるみごとな群落が、毎年この時期に一般公開されています（写真参照）。

この白い半夏生が現れる時候は、24節気をさらに細かく分けた72候のひとつとして、同じ名前で「半夏生」とよばれ、夏至から11日目頃に始まる5日間とされています。今年ちょうど今日（7月2日）から七夕（7月7日）頃までになります。「半夏生」は農事暦では田植えを済ませておくべき時期と古くからされてきました。この時期は梅雨前線の活動が最も活発な時期に対応しており、田植えなどの農作業もこの時期までに済ませておかないと、その年の稲の生長に支障をきたす可能性が高くなることを、昔のお百姓さんたちは歴史を通した長い経験から知っていたようです。

今年も先週からこの週末にかけて、梅雨前線が北上して、九州、四国、近畿、北陸の広い地域で、激しい雨が降っています。梅雨も「半夏生」の頃になると、南の太平洋高気圧が強まってくるため、前線に向かって流れこむ水蒸気量が増え、前線とその南側では大気が非常に不安定になります。どこで豪雨になるかは、湿った気流（風）の向きや強さとそれぞれの地域の地形との関係などで微妙に変わり、予測も非常に難しくなります（安成通信 2016/07/01 変わりつつある梅雨参照）。今年の「半夏生」には、台風も北上してきたため、豪雨がさらに心配です。

私はこの「半夏生」の週末（7月1～2日）を利用して、上越の妙高高原にある笹ヶ峰京大ヒュッテまで向いましたが、集中豪雨のためJR中央本線の列車が大幅に遅れて予定を変更せざるをえませんでした。ただ、ヒュッテに着いて、雨雲が漂う空に合間に残雪の山々を望み見た時、豪雨への懸念も一瞬忘れ、心はずでに夏山を楽しんでいました。

<梅雨雲の裂けたる空に岳赭き> 秋桜子



写真：建仁寺両足院庭園に咲く半夏生の群落。2014年7月6日撮影。